

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：32412

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520034

研究課題名(和文) 哲学と日本思想史研究－文献学・解釈学的方法的摂取を中心に－

研究課題名(英文) Philosophy and the Study of 'the history of Japanese Thought'-on the Adoption of Philology and Hermeneutics

研究代表者

清水 正之 (SHIMIZU, MASAYUKI)

聖学院大学・人文学部・教授

研究者番号：60162715

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、近代日本において日本の伝統的思想から近代までを統一的に捉える哲学的立場に立つ思想史研究を対象に、そのいくつかの流れを方法論の違いから、概観し分類することを先ずはこころみた。その流れを六つに分類整理したが、そのながれの多くに見られるドイツ文献学およびディルタイ解釈学の方法の受け止め方を、単に方法論的考察のみではなく、それらの方法が描き出す思想史像に内在的に踏み込むことで、その方法論の意味を考察した。それによって哲学分野の学として始まった日本思想史研究の方法論の知見が、近代日本哲学倫理学史において、どのような位置をしめるかを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The study of 'the History of Japanese Thought' in modern Japan was created under the influence of German Philology and Hermeneutics. We can hypothesize that there were about six schools. 1. Haga Yaichi and Muraoka Tsunetsugu, they adopted German philology. 2. Watsuji Tetsuro, philology and hermeneutics, he balanced between them. 3. Saigusa Hiroto, he was a materialist but adopted the hermeneutics of Dilthey. 4. Tsuda Sokichi, he was a Chinologist but also learned much about German historicism. 5. Tsuchida Kyoson, he designed the grand image of the history of Japanese Thought but could not finish it. 6. Maruyama Masao, before the War. He was a modernist and learned deeply about German philosophy and historicism. In this research, I tried to examine these six schools themselves and their relations. I published the results by some papers and books.

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：倫理学

キーワード：日本思想史 文献学 解釈学 村岡典嗣 和辻哲郎 社会的存在論 土田杏村 ディルタイ

1. 研究開始当初の背景

(1) 近代学問としての日本思想史・日本倫理思想史研究は、近代西洋哲学の影響と方法論の摂取によって成立した。本研究は、芳賀矢一、村岡典嗣が、A.ベックなどのドイツ文献学を思想史研究の方法論として摂取し、ついで和辻哲郎をはじめとして文献学からディルタイ解釈学へと知見が拡大していく中で、文献学から解釈学への受容を思想史的・歴史的に跡づけると共に、あわせて、思想史領域の視点からのみでなく、哲学・倫理学の側からの文献学・解釈学の受容と深化の理解を深め、両面から、文献学・解釈学の受容の思想的意義を、広義の日本近代倫理学史・哲学史として再配置することを考察しようと考えたことによる。

(2) 研究代表者は、倫理学の立場から日本の日本倫理思想史研究に従事してきたが、他方で、和辻哲郎や近代の倫理学・哲学をもあわせて対象とし、近代日本倫理学および哲学と、伝統的思想の研究とを往還的に手掛け、実質的な思想史研究と、倫理学・哲学的方法の考察のあいだで研究を続けてきた。本研究テーマは、事柄を近代の哲学史の中に客観的に位置づけることが主眼だが、研究代表者の研究者としての在り方に関わるものである。

2. 研究の目的

(1) 日本思想研究の創始者たちは、近代学問としてのジャンルを確立しようとする試みを通して、西洋の学問方法論を意識的に摂取してきた。近代の学問としての日本思想史研究は、こうした先駆的営みの上に形づくられてきた。受容の中心は、ドイツ文献学に始まり、解釈学(さらには解釈学的現象学)へと続く。本研究では、哲学的日本思想史研究を、仮説的に、明確な方法的意識をもったものとして六つの流れに分けてみた。すなわち。

ドイツ文献学を受容して広義の哲学史・思想史を構想した芳賀矢一、村岡典嗣、文献学から解釈学への展開を受ける形で、思想史方法論を考察した和辻哲郎、唯物論マルクス主義による永田広志、三枝博音。漢学・東洋史学の伝統をふまえながら、ドイツ流の歴史主義的文化史研究を参照した津田左右吉、

当初から解釈学を意識しつつ、さらに現象学の摂取を併せることで、浩瀚な日本哲学思想史を構想していた土田杏村、戦後の思想史研究に結実する方法論を育んでいた戦前の丸山真男、の六つである。文献学・解釈学に哲学的な関心を向けていない津田を除くと、他は、それぞれに、文献学・解釈学のへの関心を持続させている。この方法論的関心の流れ自体を、あらためて考察し、倫理学的・哲学史的連続性のなかでとらえなおすこと、また文献学・解釈学をめぐる問題意識が、思想史を専らとするのではない哲学者、たとえば、三木清、三宅剛一らのいわば社会的存在論ともいべき議論と深く関わるもので

あること等を、明らかにする。

(2) 近年、地域研究や国際文化研究という枠組みのなかで、以前と比べると日本思想研究は、一定の市民権を獲得したといえる。他方で、研究は、歴史学的あるいは文化論的なものとなり、かつての哲学的領域の研究から、離れつつある。その中で、文献学や解釈学に立つ上記の潮流の思想史像が、ポストモダンの思潮のなかで、厳しく批判を受けた。しかしそれらの批判は、背後の哲学的方法論の問題性には目が届かず、表面的なものにとどまる。本研究は、哲学的倫理学的考察の対象としての思想史研究に光をあてる。

(3) 日本の同時代の哲学のなかでの文献学の受け止め方を検討し、文献学的思想史から、哲学・倫理学への架橋のころのみの意味を考察する。即ち、和辻の文献学・解釈学、そして現象学との間でのゆれ、土田の解釈学から現象学への思想史方法論上の移行等、思想史研究のなかでの問題を明確にする。

(4) 以上につき、これまで得た知見だけでは未だ明確とはなっていない六つの潮流の相互連関を明らかにしたうえで、文献学から解釈学へと展開する思想史方法論としての摂取とそこに表れた、思想史研究領域固有の問題をこえて、展開自体を、日本近代の哲学史のなか位置づけることを期間内の目的とする。

(5) 近年、中国や韓国において、近代以前と近代以後の連続性を踏まえて思想史を組み立てようとする研究動向も生まれている。こうした東アジアの動向を、この地域で共有されるべき哲学史の構想をふまえ、今後、文献学・解釈学が、新たな相貌をもって関わってくる可能性を考察する。思想・文学・歴史の枠をこえて思想史・哲学史を構想し形成しようとする志向が薄れてきた現在、文献学・解釈学の功罪を、近代日本哲学の一齣として位置づけ、その哲学的倫理学的意義と位置を改めて明確にしておく。

3. 研究の方法

(1) 思想史研究の方法論的に区分できる仮説的にたてた流れのそれぞれを、これまで得た知見を整理し、それをてがかりにして、さらに未確定の問題を考究する。文献学・解釈学の思想史研究領域の問題展開をある程度確定しながら、思想史領域をはなれて、文献学、とりわけ解釈学の受容と理解をめぐる哲学研究の側からの知見、とくに、三木清、さらに三宅剛一などの見解とつきあわせ、文献学・解釈学の近代日本哲学史倫理学史のなかでの展開に道筋をたてる。あわせて、文献学・解釈学そのもの、およびそれらをめぐるドイツ等での議論等を、背景の正確な理解のためにも力を注いで研究をすすめる。

(2) 文献学の受容について、研究代表者による準備段階での調査研究で、芳賀・村岡についてのあらたな資料をえており、また最近はその点での新たな知見も発表されている。とくに芳賀のウーゼナー等の一国文献学の採用をめぐる当時の文献学の配置を考察したい。

(3) 唯物論的立場の思想史研究については、唯物論的思想家を発掘し個人研究をなした三枝博音、永田広志らの、批判的視点にたちつつ内在的なテキスト分析に向かう思想史研究を、その思想像ではなく、方法論をそのものとして考察する。

(4) 土田杏村については、改めてその方法論的部分での解釈学と新カント・現象学の受容を精査する。とくに "Contemporary Thought of Japan and China) などにより、中国の伝統と近代的思想との接合にむけた原理的なまざしをあらためて確定し、和辻的な思想史像とは異なる構想をもっていた土田の、文献学・解釈学を踏まえながら現象学的方法をもって思想史研究を構想した点を、考察する。

(5) なお、海外とくに東アジアの動向については、台湾・中国・韓国・日本の事情に通じている北京工業大学 Liu Diao 准教授(三木清研究等)、台湾高雄大学の廖欽彬助理教授(近代日本哲学、田辺元研究等)との連絡をこれまで以上に密にして最新の研究情報をえる。

4. 研究成果

(1) 文献学から解釈学への思想史方法論の展開と六つの潮流の相互関係をよりあきらかした。研究期間当初において、その考察を、ディルタイ協会の機関誌に発表し、文献学から解釈学への方法論的受容史を提示し、批判を仰いだ。とくに村岡典嗣における文献学の受容は既知のことだが、その村岡がディルタイを讀解していたことを周辺の史料から提示したことは、一つの成果である。

(2) 村岡の先行者、芳賀矢一につき、当時のドイツ文献学の潮流とそこにおける比較文献学の意味と芳賀の受容につき、新たな知見を明らかにした。またそれぞれの思想史像に内在的に立ち入り、それぞれの文献学・解釈学の受容の様相と問題点を明らかにした。

(3) さらに和辻哲郎について、その思想史研究における文献学と解釈学の関係を考察した。和辻の、思想史研究における文献学的傾向と、倫理学における解釈学の受容という傾向が、とくに戦後、文献学への回帰という形をとるが、その遷移と和辻の論理的な理路を、とくに考察し、その文化研究の形成過程と論理構造の関係として論じ、比較思想学会の紀

要に発表した。

(4) 和辻の思想史に対して、当初歴史主義的な思想史を構想しながらも、次第にその方法の隘路につきあたり、現象学的方法をとりいれ、歴史主義的思想史像とは異なる日本思想史を構想した、土田杏村の方法論的展開を、分析した。とくに土田が、三宅剛一との関係の中で、ディルタイと深く読み込むとともに、さらに現象学的方法へと移行し、いわば社会的存在論というべき議論に至る過程を、明らかにした。三宅の歴史を現象学的な意味における「作業台」とみて、歴史の過剰な重みを斥けようとする立場は、戦後に明確になったものであるが、その萌芽はすでに土田との交流のなかで、ディルタイ解釈学的方法に対する批判として芽生えていたものであり、土田と共有する問題意識であったことをあきらかにした。その成果は、日本感性工学会感性哲学部会の企画になる共著において、公表した。

(5) 以上の知見から、文献学から解釈学への展開という日本思想史研究の方法論について、とりわけディルタイ精神史の方法論的批判的摂取の様相を明らかにし、思想史方法論を、日本近代哲学史倫理学史のひとつとして位置づけることに貢献できたと考える。唯物論的立場に立つ三枝博音の方法論においても、ディルタイの受容が大きな意味をもつことも明らかにした。

(6) 本研究の発端となる問題意識には、思想史として思想の歴史を描き、広義の哲学史とすること自体の意義とは何か、ということがあった。近年、文献学的・解釈学的思想史像は、循環的な思想史像を提示したものと批判された。研究代表者は、その批判に一定の意義を認めるとともに、このような形であれ一定の思想史像(哲学史)を提示したことは、日本の倫理学・哲学にとってはそれなりに僥倖であったという立場に立つ。批判に値する思想史像をもったとみているが、研究者自身の思想史像につき、日本思想に関する講座において、「自然」をめぐる考察の成果を公表し、本研究によって構想できた日本思想史像の一端と、新たな見方を提示しえたと考える。

(7) また以上でえた知見を、中国および台湾の学会へ参加し発表し、また雑誌論文にあらわし、伝統思想を近代思想史・哲学史に位置づけるという、東アジアの哲学倫理学および哲学史倫理学史研究の現代的課題につき、討議にゆだねることができ、共通の問題意識の醸成に寄与したし今後の共同研究のみちを開くことができたと考える。

(8) 本研究の研究成果は、『哲学と思想史研究 日本の解釈』という題の研究書として近いうちに公表できる予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

清水正之、「具体的普遍と特殊の間 和辻哲郎と比較思想」『比較思想』VOL.39, 査読あり、33-40 頁、2013.3

清水正之、「東アジア哲学史の可能性 土田杏村のころみにみる」中華民国中央研究院国際学術研討会「論文集」VOL.1 査読あり、日本語 1-8 頁、2012.1.5

清水正之、「思想史の方法と課題 文献学から解釈学へ」『デルタイ研究』第 22 号、査読あり、5-20 頁、2011.12

清水正之、「21 世紀的日本哲学：戦後和辻哲郎的思想変遷」『浙江樹人大学学报』(中国浙江省)第11卷第3期、査読あり、68-73 頁、2011.5

〔学会発表〕(計3件)

清水正之、「国学の近代化とメディア－和辻哲郎の「具体的普遍」の意義」招待講演(第三回日本研究大会) 2012.11.18、国立中山大学日本研究中心、台湾高雄

清水正之、「具体的普遍と特殊 和辻哲郎と比較思想」(比較思想学会シンポジウム「和辻哲郎と比較思想」) 2012.6.24、お茶の水女子大学

清水正之、「東アジア近代哲学史の可能性 土田杏村にみる」(中華民国中央研究院中哲研究所・国際学術研討会) 2012.1.5、中央研究院、台北

〔図書〕(計2件)

清水正之、『岩波講座 日本の思想』第四巻、分担執筆 199-225 頁(総 329 頁)、2013.8.23

清水正之、『感性のフィールド』第一章「生活価値の哲学」担当、3-22 頁(総 196 頁) 2012.9.5

〔その他〕

ホームページ等

<http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

清水正之 (SHIMIZU, Masayuki)
聖学院大学人文学部教授
研究者番号：60162715